

大津 歴博 だより

OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

2024
No.
136

contents

- 特集 令和4・5年度の新収蔵品
P1～P2
- 収蔵品紹介 中村家資料
P3 (膳所藩士関係資料)
- コラム 展示を楽しむワークシート
P4～5
- 収蔵品紹介 有卦絵 船橋次郎左工門・藤娘・福岡貢
P6 (文久元辛酉年八月五日酉の刻) 歌川芳幾画



大津市歴史博物館

令和6年12月6日 発行

〒520-0037 大津市御陵町 2-2

TEL(077)521-2100

<https://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

特集

令和4・5年度 の新収蔵品



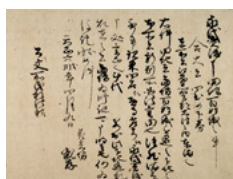
厨子入り日吉山王垂迹神曼茶羅図



浮世又平名画奇特 歌川国芳画



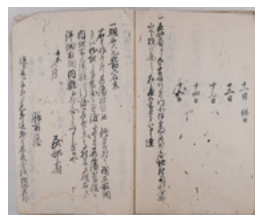
赤楽茶碗 岩崎健三・
邨松雲外絵付



園城寺花光坊親存売券案



近江八景図三井晩鐘
樹下石上画



旧膳所藩維新史料



茂呂勝吉像(茂呂家資料)



近江八景
粟津晴嵐
三代歌川豊国



昭和初期16ミリフィルム



大津町古絵図

■ 購入資料

	名 称	時 代
1	大津絵 役行者	江戸時代
2	大津絵 鍾馗	江戸時代
3	大津絵 瓢箪鯉	江戸時代
4	大津絵 十三仏	江戸時代
5	大津絵 鬼念仏 岩崎象外賛	江戸時代
6	大津絵 鬼念仏	江戸時代
7	浮世又平名画奇特 歌川国芳画	江戸時代
8	浮世又平名絵の巻 歌川小芳盛画	慶応4年(1868)
9	近江八景図 比良暮雪・三井晩鐘・勢田夕照 樹下石上画	江戸時代
10	栄久堂板 近江八景之内 比良暮雪 歌川広重画	江戸時代
11	近江八景之内 辛酉の夜雨 深斎英泉画	江戸時代
12	近江八景之内 粟津晴嵐 三代歌川豊国画	江戸時代
13	近江八景 石山秋月 勝川春山画	江戸時代
14	有卦絵 船橋次郎左工門・藤娘・福岡貢(文久 元年八月五日酉の刻) 歌川芳幾画	文久元年(1861)
15	一庭啓二日誌(第三号)	明治時代
16	旧膳所藩維新史料	江戸時代～明治時代
17	園城寺花光坊親存売券案	安土桃山時代
18	葉屋傳兵衛家文書	江戸時代
19	首註陵墓一隅抄	明治時代

大津市歴史博物館では、大津市や滋賀県の歴史文化に関わる資料を、購入・ご寄贈により収集しています。令和4・5年度は購入19件、受贈13件、計32件の貴重な資料が加わりました。令和7年3月4日(火)から4月13日(日)まで「令和4・5年度 新収蔵品展」で主な資料をお披露目します。

■ 受贈資料

	名 称	時 代
1	瓢花入「雀の御宿」山元春挙銘・賛	大正～昭和時代(戦前)
2	赤楽茶碗 岩崎健三・邨松雲外賛	大正～昭和時代(戦前)
3	厨子入り日吉山王垂迹神曼茶羅図 附:鏡・香炉・宝珠・海老錠	江戸時代
4	大津絵十種図 四代目高橋松山筆	平成元年(1989)
5	元持家文書	江戸～明治時代
6	木村家資料	江戸～昭和時代(戦後)
7	大津町古絵図(市指定文化財)	江戸時代
8	山田家資料	江戸～平成時代
9	膳所総絵図(市指定文化財)	元禄15年(1702)
10	中村家資料	江戸～昭和時代(戦後)
11	茂呂家資料	江戸時代
12	昭和初期16ミリフィルム(増田信一郎撮影)	昭和時代(戦前)
13	西村誠夫氏写真アルバム資料	昭和時代



大津絵 鬼念仏



大津絵 瓢箪鯨

様々な資料が収蔵された中で、今回特筆すべき大津絵が複数あります。ここで紹介しましょう。現在、大津絵は、博物館や収集家等の間で確認されている数が500～600点程度であり、かつて旅人相手に売られた膨大な量に対し、各家庭での壁に貼り放しでの使用（ポスター的用途や穴ふさぎ）が災いして、残存数が少ないのが現状です。したがって、希少で資料的価値の高い大津絵に出会える可能性は低いのですが、近年、立て続けに確認する事ができました。

まずは《鬼念仏》です。大津絵の代表的な画題として、当館でもすでに5件の収蔵品があります。今回の作例は、草創期の鬼念仏とも言える姿をしています。膝下が長い肉食恐竜的な脚と2本の^{かざづめ}鉤爪、上顎から外向きに突き出る2本の犬歯、^{たけ}丈の短い墨染の法衣など、より異形な姿なのが特徴ですが、さらに、^{ひげ}髭や胸毛が、あえて黒髭と白髭で描かれている点も特筆されます。これは、工程の省略が進んでいない古い時期の特徴です。ちなみに、本紙上部の足し紙には18世紀の大坂の画人、岩崎象外（生年不詳、寛政6年[1794]頃没）による宝暦11年（1761）の漢詩文があります。画家に愛蔵されて掛軸に表装された結果、伝存したのでしょう。

続いては《瓢箪鯨》。鬼念仏とともに大津絵十種の中では古株の画題で、近松門左衛門の『傾城反魂香』

（宝永5年・1708）にも登場します。にもかかわらず、この画題は古い作例がありません。なぜか18世紀半ば以降のゆるい図像の瓢箪鯨ばかりが現存しており、唯一、日本民藝館に、^{みんげいかん}描き込みが多い古い時期の作例があります。このたび、当館に収蔵された瓢箪鯨は、待望の古い作例です。毛並みが細かく書き込まれたやんちゃな猿が、大きな瓢箪を抱えて、まるで琵琶湖の主のようなシルエットでせまる大鯨を押さえ付けようとする、迫力のある大津絵です。

今回、大津絵のごく初期段階を窺わせる《十三仏》も当館に収蔵されました。従来の古い大津絵仏画よりも一世代は古い可能性があります。大津絵的なラフな文^{ぶん}廻し^{まわ}し使いの光背の頭光。通例の大津絵十三仏と近似した版木押しの各尊像の頭部（如来形、菩薩形、僧形のお顔が各々共通）。本紙のサイズも大津絵仏画とほぼ同じ。大津絵制作のノウハウが徐々に備わっていく過程を窺い知る貴重な作例です。

《^{えんのぎょうじや}役行者

（学芸員 横谷賢一郎）



大津絵 十三仏



大津絵 役行者

中村家資料（膳所藩士関係資料） 本館蔵

ある家が途絶えたとき、そこに伝えられてきた資料は親類や関係者など人手に渡ればいい方で、残念ながら歴史的な情報を含む資料であっても廃棄されることがほとんどでしょう。

令和5年度に収蔵された「中村家資料」は、江戸時代に膳所藩士として活躍した家に残されてきた資料群です。特に藩領支配などに関わっていたようで様々な支配関係の記録が含まれています。内容紹介の前に、当館に収蔵されることになった経緯を簡単に説明しておきましょう。

中村家資料は、ごく一部が昭和50年代の『新修大津市史』編纂に利用され、当館の開館後は、膳所城下町全体を詳細に描いた絵図（市指定文化財）をご寄託いただきました。しかし令和の時代に入り、ご高齢であった所蔵者の関係者より連絡をいただき、他の資料の調査・保存について協議し、全体の調査をさせていただくことになりました。残念ながら調査中に所蔵者は逝去され、改めて資料継承者にあたる方とご相談したところ、「お役に立つのであればぜひ寄贈したい」とのお申し出を受けました。そこで、遺産整理の傍らで、われわれ複数の学芸員が資料の内容を確認し、大津の歴史に関するものについてご寄贈いただくことになりました。

以上のような経緯で収蔵されることになった中村家資料は非常に膨大な数にのぼります。段ボール箱で25箱を超え、古文書・古記録だけでなく、版本や近代書籍、器物などが多く含まれています。当館では、令和5年度から開始した未指定文化財調査事業の中に、本資料群の調査整理を位置付け、佛教大学歴史学部と大津古文書研究会の方々と共同で調査・整理にあたってきました。

現在、箱ごとの掃除・整理・写真撮影を進める中で、中村家資料が、(1)膳所藩士中村庄司（江戸時代後期）の古文書・古記録、(2)江戸時代の版本、絵図類、(3)近・現代の中村家に関する資料群（書簡類）に大別できることが見えてきました。このうち、(1)の藩士時代の資料には、中村家の俸禄や由緒に関するもの、「御小姓役」や「小納戸方」を務めていた際の詳細な業務マニュアル、また膳所藩が禁裏火消役を担当していたことに関連する記録類が多く含まれています。さらに、滋賀県立図書館

に所蔵されている藩領支配のための公的記録である「膳所藩郡方日記」の慶応4年分が本資料群に含まれていることも注目されます。総じて、膳所藩の藩領支配や記録作成に関する資料が確認できたのです。

加えて、郷土史家であった竹内将人氏が『膳所六万石史』で紹介された「御為筋一件」という家中騒動資料、あるいはこれまで知られていなかった藩校「遵義堂」の蔵書目録なども含まれています。改めて全体を見直しても、中村家資料は個人の家の資料という性格を超えて、膳所藩や膳所の歴史を考える一大資料群であることは間違いないでしょう。

なお、こうした古文書・古記録だけでなく、器物として幕末の膳所藩士の旗指物の絵画資料や甲冑なども含まれています。今後、調査・整理の進捗をみて、展示などで順次公開していく予定です。

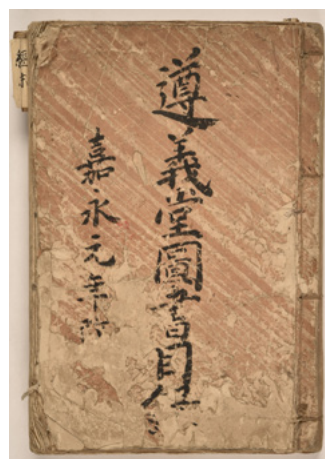
歴史資料の散逸や廃棄は、そのまま歴史が失われていくことと同義だと考えています。私たち博物館は、残された個人の家の資料から歴史的価値を見出し、ご寄贈を通じて大津という地域の歴史を未来に伝え、次世代につなげるよう収蔵させていただいています。博物館の存在や使命の根幹は、まさにそこにあるといってもいいでしょう。

今後も、多くの貴重な歴史資料が博物館で適切に収蔵できるように、博物館収集事業について、定期的に皆さんにお伝えし続けたいと思います。

（学芸員 高橋大樹）



整理前の文書収納状況



藩校「遵義堂図書目録」

展示を楽しむワークシート

近年の当館企画展では、展示室入口にクイズ形式のワークシートを置いていることが多いのですが、ご存じでしょうか。ワークシートは、問題やストーリーを読み解きながら展示を見ることで、楽しみながら展示の内容について理解を深めることができるため、多くの博物館がオリジナルのワークシートを作って配布しています。主には子ども向けですが、大人もついつい熱中してしまうものです。

歴博だより No.122 でも紹介したように、新型コロナウイルス感染症対策の中で、当館でも、SNS やホームページを通してどこからでも楽しめるものとしてワークシートやペーパークラフト、ぬりえなどを作成・公開してきました。そして、これをきっかけに、令和4年度からは企画展ごとのワークシートも配布しています。一部は、ホームページで公開中ですが、企画展に合わせたワークシートは会期が終わるとそれ限りとなってしまいます。

そこで、これまでの記録もかねて、No.122 のコラム「博物館と普及活動」の続編として、当館オリジナルのワークシートについてまとめてみました。皆さんに展示を楽しんでもらうための博物館の中での試行錯誤の内情も含めてご紹介します。

ワークシートづくりの試行錯誤

企画展ごとのワークシートを作るきっかけとなったのは、令和3年開催の夏季企画展「大津のどうぶつ博物館」でした。大津の歴史文化に関わりのあるどうぶつモチーフを集めた展示で、コロナ禍のためイベント開催の制限が多い時期でしたが、小中学生や親子連れの方の新たな来館のきっかけになればと、閉館時刻の17時の後に定員



シルエットクイズの
ワークシート (解答編)

を設けてギャラリートークを行う「トワイライトミュージアム」を開催しました。閉館後なので、ナイトミュージアムと言いたかったところでしたが、夏場でまだ明るいためにトワイライトとしました。その子ども向けの回では、参加した子どもたちにシルエットから展示品を探すワークシートに挑戦してもらいました。

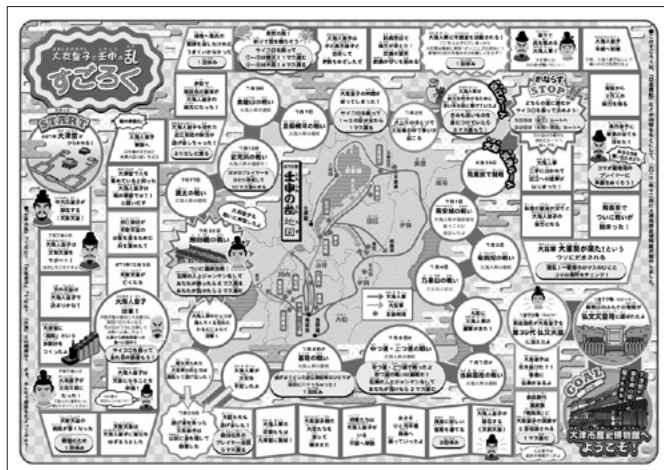
このイベント限定のワークシートが好評だったことから、令和4年夏の企画展「仏像をなおす」以降、会期中に誰でも手に取って楽しめるよう、企画展ごとのワークシートを作成するようになりました。

「仏像をなおす」は、今に伝わる仏像が様々な形で修復・復興が繰り返されて来た歴史を紹介した企画展です。展示の解説文は基本的に大人向けでしたが、夏休み時期だったことから小学生高学年ぐらいを対象として、クイズを解きながら展示を見るワークシートを作りました。また、主な仏像や神像の種類を簡単な解説とイラスト付きでまとめた解説パネルを展示し、ロビーには仏像になりきって写真が撮れるフォトスポットを作るなど、楽しめる要素を工夫しました。



クイズ形式の「仏像をなおす」ワークシート

令和4年秋の企画展「大友皇子と壬申の乱」でも、同様にクイズ形式のワークシートを作成しました。また、会期終了後となる年末の時期に合わせて、遊びながら壬申の乱の経緯と大友皇子のことを知る事ができるすごろくを作成し、ホームページで公開しました。これは新聞にも取り上げられて、小学校などでも活用していただきました。



「大友皇子と壬申の乱」すごろく (現在も公開中)

令和5年春の企画展「湖都大津の災害史」のワークシートは、「おおつ災害史かるた」として、絵札に展示品の画像を使い、その展示品を探して、読み札部分の文字を埋めるといった内容でした。

夏の企画展「発掘された大津の歴史」は、大津市内の発掘調査で見つかった土器や石器など、多くの考古資料を展示しましたが、この時は、小学校低学年でも参加できる「かんたん」と、高学年以上向けの「むずかしい」の2種類のワークシートを出しました。「かんたん」の内容は、展示品の銅鐸を見てその文様を描き写してみるものや、瓦などに表現された文様と同じイラストを探すものなどで、答えを見つける難易度はぐっと下げつつ、展示品をじっくり見てもらうというポイントは押さえたものでした。この頃、回数を重ねるごとにワークシートの内容作りにも磨きがかかり、アンケートでは「何を理解してほしいのかという点で以前よりもよくなっている。あとで自分も調べてみようという気にさせる」と評価していただくこともありました。



「かんたん」バージョンのワークシート

この年の秋の企画展「本福寺」では、古文書を多数展示していたことから、ワークシートは巻物仕立てのデザインとして、くるくると巻いて筒状にして配布しました。令和6年夏の企画展「京極高次」でも、同様に巻物風のワークシートでタイトルは「京極高次謎解き絵巻」とし、内容だけでなく、デザインも充実させています。

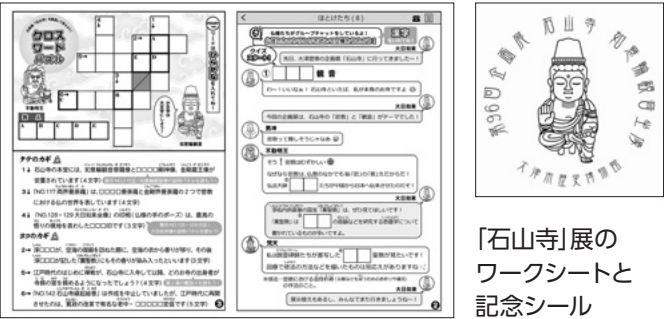


巻物風デザインのワークシート

令和6年の企画展「紫式部と祈りの世界」や「石山寺」では、ワークシートの問題の中にクロスワードパズルが登場しています。展示のキャプションをじっくり読まない

と解けないところもあり、おそらくかなり高難易度のようですが、「石山寺」展の際には、当館へ職場体験に来ていた中学校2年生の生徒が、昼の休憩時間ごとに展示を見に行き、チャレンジしている姿が見られました。

ちなみに、ワークシート参加者には企画展オリジナルのシールなど記念品もありますので、今後新しいワークシートを見かけた際は、大人の方もぜひご参加ください。



ワークシートを作っているのは

このような当館のワークシートですが、実は、これを主に企画・制作しているのは、受付担当の職員たちです。学芸員とはいうと、企画展準備の資料調査や出品交渉、図録の執筆、展示の設営作業のほか、諸々の事務処理まで含めて何かと慌ただしくしており、展示にプラスの要素やアイデアを思いついても、これまではなかなか形にするところまでには至りませんでした。そんな中で、受付担当職員から、企画展関連の楽しめるものをと色々な提案があり、担当学芸員と相談して、問題づくりやイラスト、デザインなどを形にしてくれています。会期が近づいてきた頃に担当学芸員に内容チェックが回ってきて、その完成度に驚くというのが、最近の定番になりつつあります。

今年の大河ドラマに合わせて、およそ1年間をかけて開催している特集展示「源氏物語と大津」の会場に掲示しているオリジナルキャラクターのイラストや、その場で見て楽しむクイズパネルも、受付の職員たちで制作したものです。会場の中で探して楽しめるクイズパネルは、画像投稿中心の某SNS風になっており、オリジナルキャラクターの紫式部ちゃんや清少納言さんがコメントを送り合っているのを読むと答えのヒントがわかるというスタイルです。こちらの参加の記念品はスマートフォンの壁紙画像で、展示室とロビーにあるクイズパネルのどこかに、入手できるQRコードがありますので探してみてください。

今後も、展覧会の内容と合わせて楽しむコンテンツを充実させるため、職員総出で準備していますので、ご来館の折にはぜひご注目ください。（学芸員 福庭万里子）

う け
有卦絵

船橋次郎左工門・藤娘・福岡貢(文久元辛酉年八月五日酉の刻)

歌川芳幾画 文久元年(1861) 縦 35.9cm、横 25.1cm 本館蔵

陰陽五行思想。なにやら聞き覚えがある、という方は少なくないと思います。実は、干支はそのひとつです。天の気を行らせる五行思想では、人々は生年の十干に従って、木・火・土・金・水の五材いずれかの性質に属しています。そして五材はそれぞれに相互関係を及ぼしているとされます。本作もそれにちなんだ作品です。

まず、右上の発句前書きに注目してください。「文久元辛酉八月五日酉の刻に / 木性の人うけ(有卦)に入り給ふを / 祝をと需におうして」とあります。なぜ、この年月日の時刻に木性の人は「有卦」に入り、お祝いをするのか。そう思って万延2年(同年は2月19日、文久に改元)の「伊勢暦」で全ての干支を確認しました。まず、文久元年の干支は前書きの通り辛酉。「辛」は陰の金性、「酉」も陰の金性です。続いて同年八月は丁酉、陰の火性「丁」と酉。そして五日もなんと辛酉、そして酉の刻です。つまり、辛酉が二重、酉が四重で、金性の六重状態となるわけです。金性は木性を相剋(抑制)する性質ですが、それがピークを迎える年月・日時という訳です。

このピークを境に、以降は木性への金性の相剋が弱まり続けます。気の行りのバランス回復から、水性から木性へエネルギーが流れ込む相生が起ることから、十干の甲・乙の歳生まれの人、7年間に渡って吉事が続く「有卦」(吉年)に入るとされ、ほうぼうでお祝いが開かれました。特に本作は、前書きにあるように、わざわざ「有卦」入りを祝う発句を人気役者に頼んで詠んでもらい、その詠句を浮世絵版画で摺り出して配布した「有卦絵」なのです。

故にかなりの凝り性ぶりをみせた有卦絵となっています。具体的には、有卦絵の慣例として、縁起を担ぎ、「福」に繋がる「ふ」が付くモチーフを描くのですが、本作は歌舞伎の人気演目「杜若艶色紫」の役「船橋次郎左工門」と、幕末期に大流行していた大津絵節を意識した歌舞伎舞踊の「藤娘」、やはり歌舞伎「伊勢音頭恋寝刃」の主要な役「福岡貢」と、いずれも「ふ」から始まる有名な役を演じた役者に発句を依頼し、三役ならぬ「三ふ」揃い踏み役者絵に仕立て、そこに、彼らの詠句を、各々の頭上に添えているという具合です。(署名は役者名ではなく彼らの俳号)。しかも、皆さり気なく「ふ」にちなんだ語句を

詠み込んでおり、さすが人気役者達だけあって、有卦絵の意図をよく心得た対応ぶりに感心してしまいます。

「店経の布施に猶升残暑かな」米升(四代目市川米蔵)

「振袖の捌兼たる踊かな」曙山(三代目澤村田之助、当時人気の若手女形)

「後の袷二見の風にふかれけり」紫扇(九代目市川團十郎)

ちなみに本作の浮世絵師は、幕末～明治期に活動した歌川芳幾(1833～1904)です。姓は落合、名は幾次郎。画姓は歌川。号は一恵斎、一蕙斎、蕙斎、朝霞楼、洒落斎、蕙阿弥など。歌川国芳の門下で、月岡芳年とは兄弟弟子(芳幾が兄格)でした。一時は浮世絵師として芳年と人気を二分する程でしたが、のちに新聞人としてまた挿絵画家として錦絵新聞の発行に精力を傾けました。なお、本作の板元は「若与」こと若狭屋与市(山本与市)の若林堂(芝神明前三島町)です。

(学芸員 横谷賢一郎)

